

## 国内の畜産物の需給動向

# 牛肉

### 6年6月の牛肉生産量、前年同月比3.5%減

#### 生産量

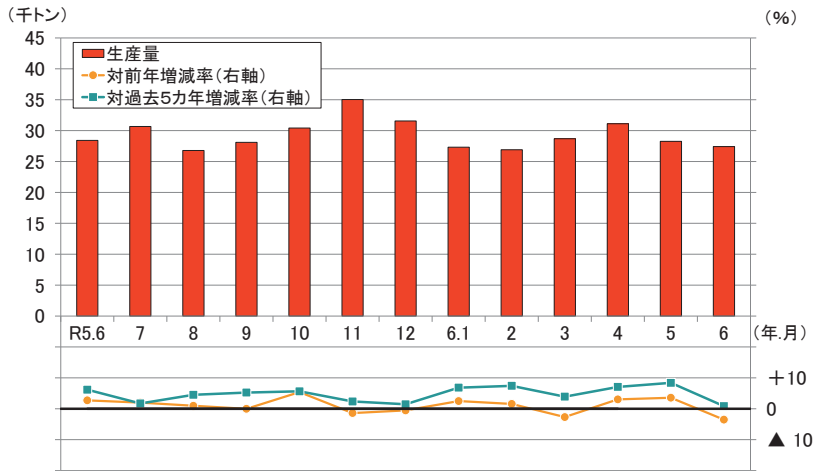
令和6年6月の牛肉生産量<sup>(注1)</sup>は、2万7418トン（前年同月比3.5%減）と前年同月をやや下回った（図1）。品種別では、和牛は1万3857トン（同2.4%増）と前年同月をわずかに上回った一方、交雑種は7200

トン（同7.4%減）、乳用種は6109トン（同9.1%減）と、ともに前年同月をかなりの程度下回った。

なお、過去5カ年の6月の平均生産量との比較では、0.9%増とわずかに上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

#### 輸入量

6月の輸入量は、冷蔵品は、国内需要の低迷により低調に推移するも、豪州産およびニュージーランド産輸入量の増加などから、1万7706トン（前年同月比7.4%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。冷凍品は、現地相場高の影響から米国産輸入量が減少した一方、豪州産およびニュージー

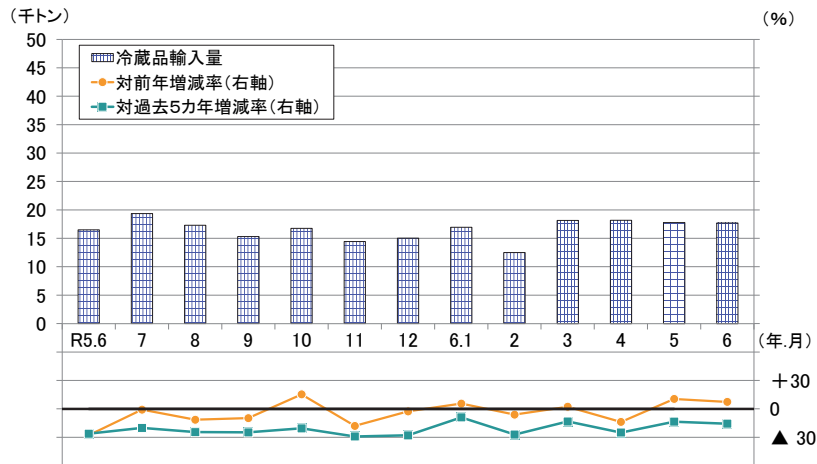
ランド産のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加したことなどから、2万9825トン（同10.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図3）。この結果、輸入量の合計<sup>(注2)</sup>でも、4万7572トン（同9.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

なお、過去5カ年の6月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は15.6%減とかなり大きく

下回った一方、冷凍品は1.8%増とわずかに上回る結果となった。

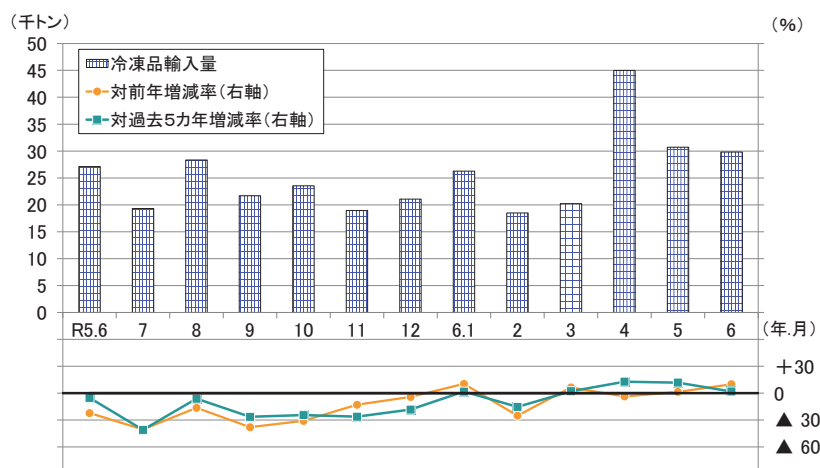
(注2) 輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## 家計消費量等

6月の牛肉の家計消費量(全国1人あたり)は149グラム(前年同月比9.8%減)と前年同月をかなりの程度下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の6月の平均消費量との比較では、15.5%減とかなり大きく下回る結果となった。

6月の外食産業全体の売上高は、前年より

土日が各1日多く、また、全国的に梅雨入りが遅く雨天日が少なかったため人出が増え、訪日外国人客の需要も堅調だったことから、前年同月比12.4%増と前年同月をかなり大きく上回った(一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」)。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、夜間メニューの充実やランチメニューの値下げなどが貢献し、同10.7%増

と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風も、クーポンやアプリによる集客および新規出店などが奏功し、同12.2%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、土日が多い曜日回りと団体客の取り込みで、同14.9%増と前年同月をかなり大きく上回った。

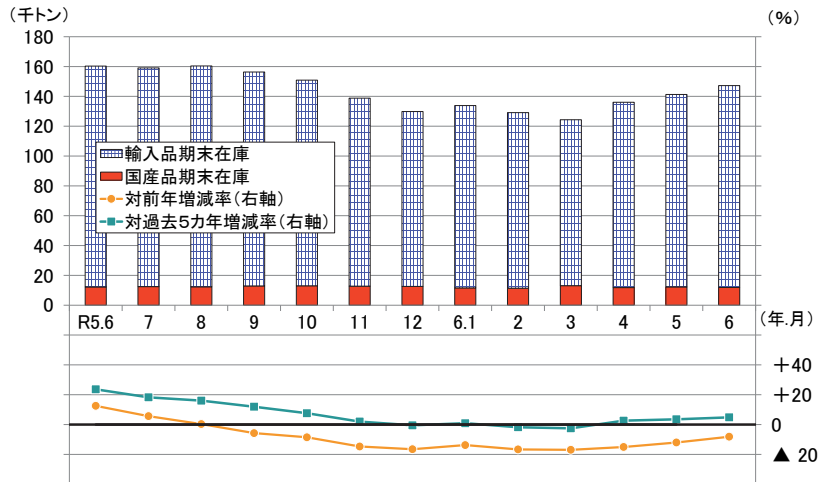
### 推定期末在庫・推定出回り量

6月の推定期末在庫は、14万7229トン

(前年同月比8.2%減)と前年同月をかなりの程度下回った(図4)。このうち、輸入品は13万5344トン(同8.6%減)と前年同月をかなりの程度下回った。

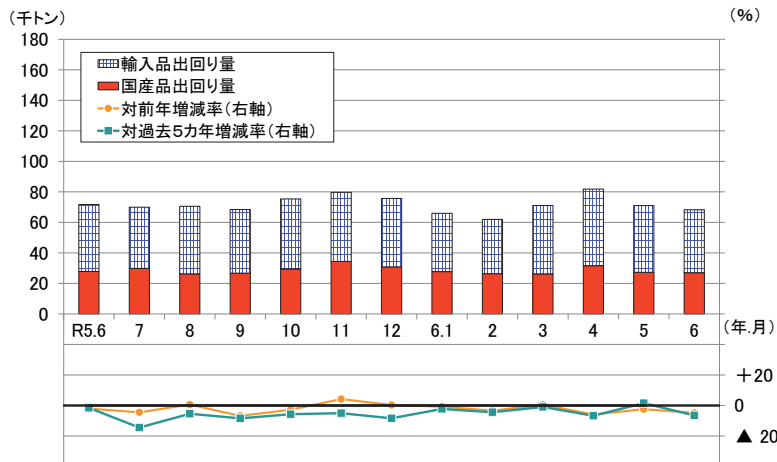
推定出回り量は、6万8256トン(同4.8%減)と前年同月をやや下回った(図5)。このうち、輸入品は4万1226トン(同6.1%減)とかなりの程度、国産品は2万7030トン(同2.8%減)とわずかに、いずれも前年同月を下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

# 豚肉

## 6年6月の豚肉生産量、前年同月比9.8%減

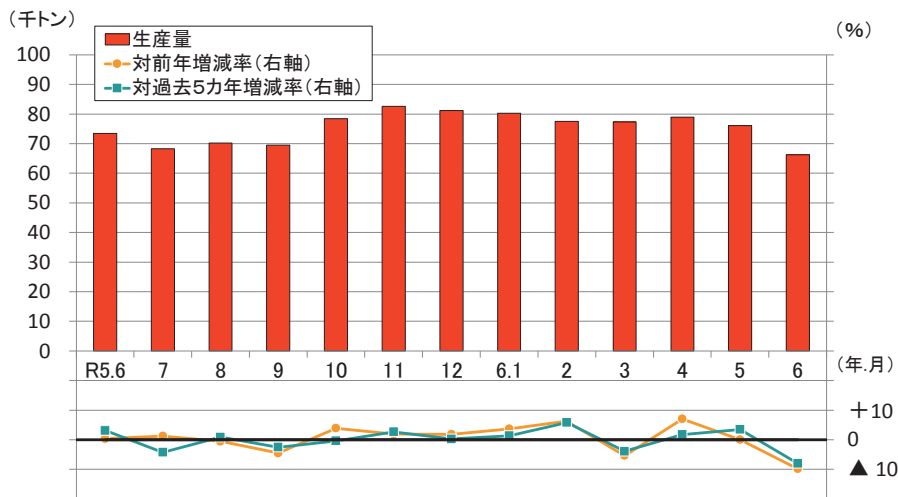
### 生産量

令和6年6月の豚肉生産量は、6万6310トン（前年同月比9.8%減）と前年同月を

かなりの程度下回った（図1）。

なお、過去5カ年の6月の平均生産量との比較でも、8.0%減とかなりの程度下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

### 輸入量

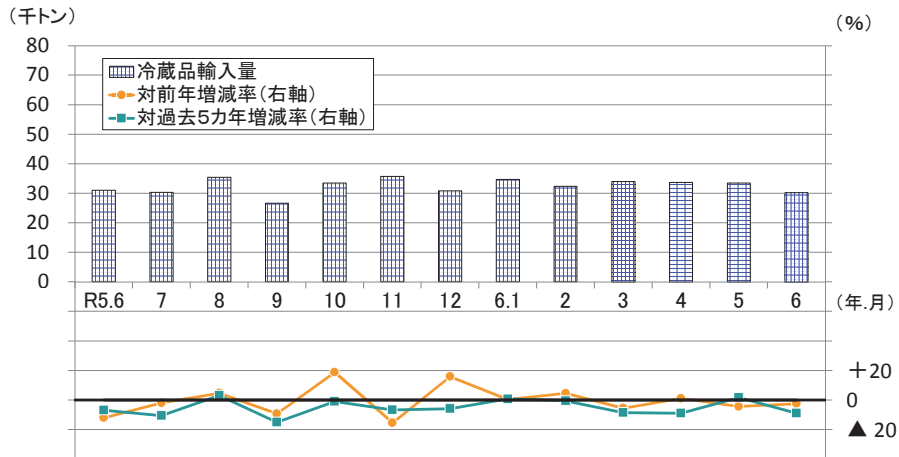
6月の輸入量は、冷蔵品は、現地相場高の影響により米国産輸入量が減少したことなどから、3万220トン（前年同月比2.4%減）と前年同月をわずかに下回った（図2）。冷凍品は、ブラジル産輸入量が増加したことなどから、5万1417トン（同2.2%増）と前年同月をわずかに上回った（図3）。この結果、

輸入量の合計<sup>(注)</sup>では8万1660トン（同0.4%増）と前年同月をわずかに上回った。

なお、過去5カ年の6月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は8.8%減とかなりの程度下回った一方、冷凍品は9.0%増とかなりの程度上回る結果となった。

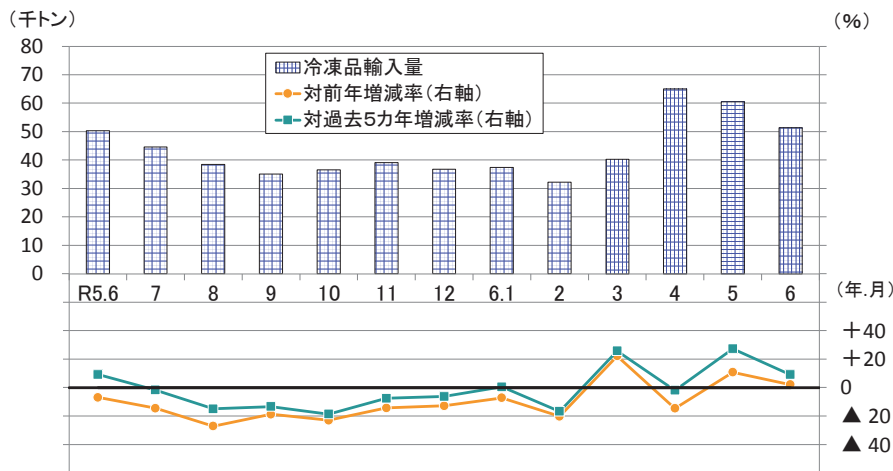
(注) 輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## 家計消費量

6月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、626グラム（前年同月比2.4%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の6月の平均消費量との比較でも、2.3%増とわずかに上回る結果となった。

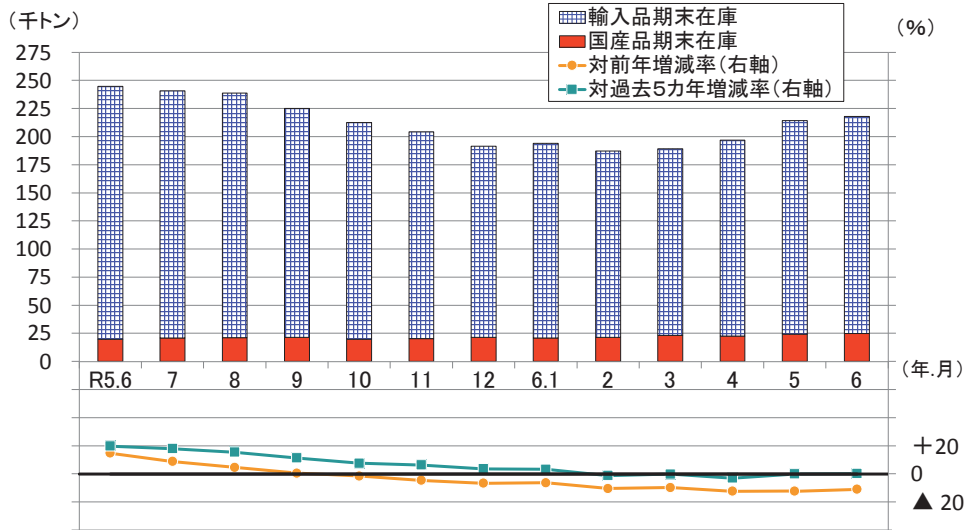
## 推定期末在庫・推定出回り量

6月の推定期末在庫は、21万7906トン

（前年同月比11.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図4）。このうち、輸入品は、19万3156トン（同14.2%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

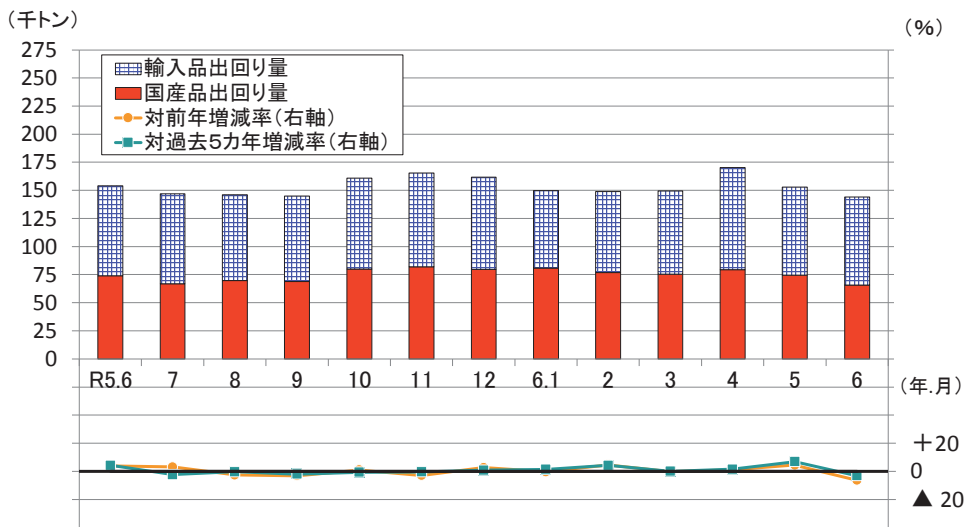
推定出回り量は、14万4121トン（同6.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図5）。このうち、国産品は6万5692トン（同11.1%減）とかなり大きく、輸入品は7万8429トン（同2.0%減）とわずかに、いずれも前年同月を下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

# 鶏肉

## 6年6月の鶏肉生産量、前年同月比1.0%増

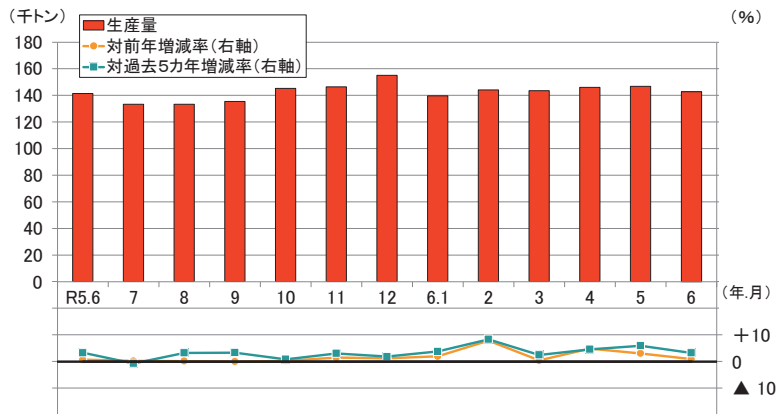
### 生産量

令和6年6月の鶏肉生産量は、14万2759トン（前年同月比1.0%増）と前年同月を

わずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の6月の平均生産量との比較でも、3.2%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注1：骨付き肉ベース。  
注2：成鶏肉を含む。

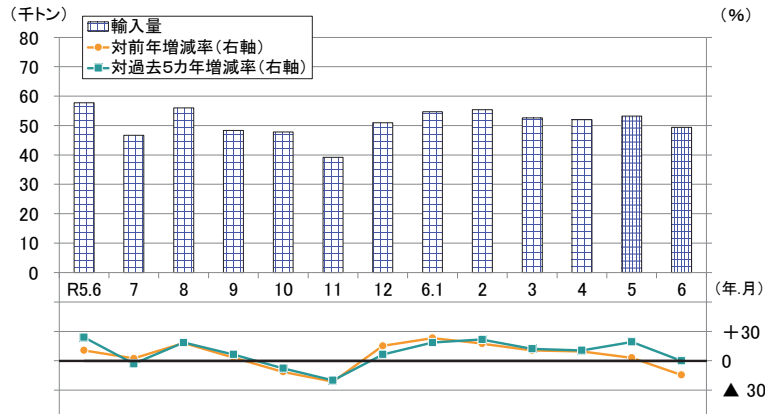
### 輸入量

6月の輸入量は、国内の節約志向を背景とした堅調な鶏肉需要により、安定的に推移するものの、前年同月の輸入量が、ブラジルでの高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生

を懸念した供給不安により多かったことなどから、4万9373トン（前年同月比14.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図2）。

なお、過去5カ年の6月の平均輸入量との比較では、0.1%増と同水準という結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

## 家計消費量

6月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)は、544グラム(前年同月比8.5%増)と前年同月をかなりの程度上回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の6月の平均消費量との比較でも、8.1%増とかなりの程度上回る結果となった。

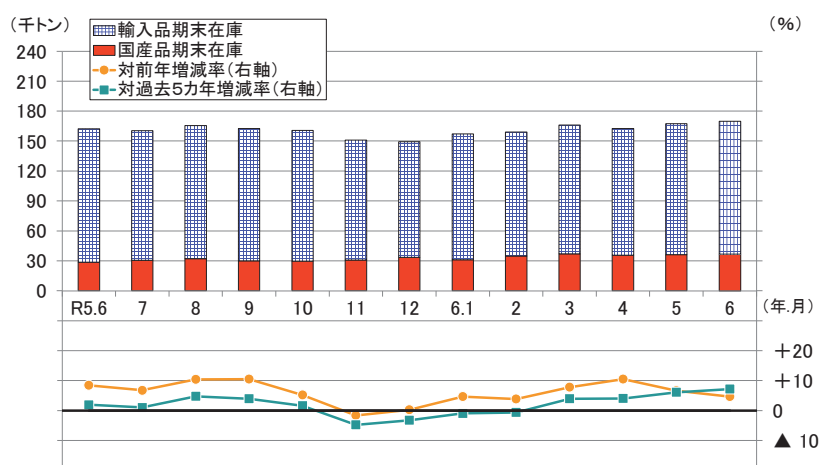
## 推定期末在庫・推定出回り量

6月の推定期末在庫は、16万9774トン

(前年同月比4.7%増)と前年同月をやや上回った(図3)。このうち、輸入品は13万3066トン(同0.4%減)と前年同月をわずかに下回った。

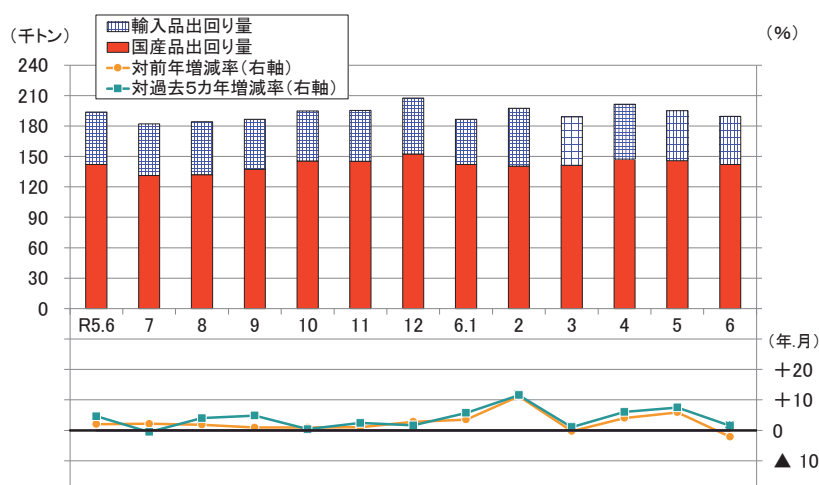
推定出回り量は、18万9662トン(同2.1%減)と前年同月をわずかに下回った(図4)。このうち、国産品は14万2314トン(同0.1%増)と前年同月並み、輸入品は4万7348トン(同8.2%減)と前年同月をかなりの程度下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大西 未来)



# 牛乳・乳製品

## 6月の全国の生乳生産量、前年同月を5カ月ぶりに下回る

### 全国の生乳生産量、前年同月比0.5%減

令和6年6月の生乳生産量は、61万6308トン（前年同月比0.5%減）と前年同月を5カ月ぶりに下回った（図1）。地域別に見ると、北海道では35万2158トン（同1.1%減）と前年同月を6カ月ぶりに下回った一方、都府県では26万4150トン（同0.3%増）と前年同月並みとなった。

6月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは33万1031トン（同0.0%減）と前年同月並み、このうち、業務用向けについては2万2237トン（同5.1%増）と前年同月をやや上回った。

乳製品向けは、28万1415トン（同0.9%減）と前年同月を6カ月ぶりに下回った。

これを品目別に見ると、クリーム向けは5万9751トン（同3.7%増）、チーズ向けは4万1003トン（同9.8%増）といずれも前年同月を上回った。一方で脱脂粉乳・バター等向けは、13万6138トン（同5.4%減）と前年同月をやや下回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

### 全国の牛乳生産量、前年同月並み

6月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は26万5541キロリットル（前年同月比0.0%）と前年同月並みとなった。成分調整牛乳は1万8314キロリットル（同9.1%減）と前年同月をかなりの程度下回り、加工乳は1万493キロリットル（同2.8%減）と前年同月をわずかに下回った。

### 6月のバター生産量、前年同月を5カ月ぶりに下回る

6月のバターの生産量は、5294トン（前年同月比6.8%減）と前年同月を5カ月ぶりに下回った（図2）。出回り量は6188トン（同16.0%減）と前年同月を大幅に下回った（農畜産業振興機構調べ）。6月末の在庫量は、2万8004トン（同6.2%減）と前年同月をかなりの程度下回ったが、前月比では6カ月連続で上回っている（図3）。

図1 生乳生産量の推移

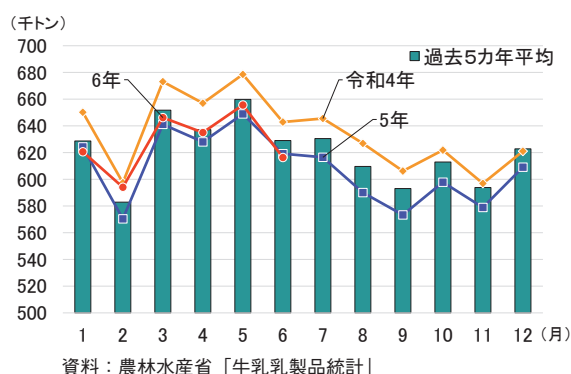


図2 バターの生産量の推移

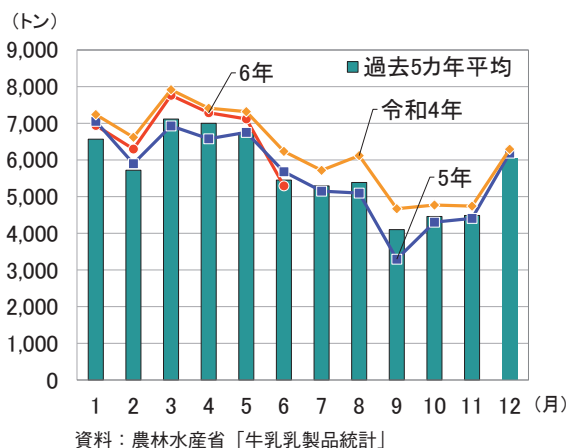


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

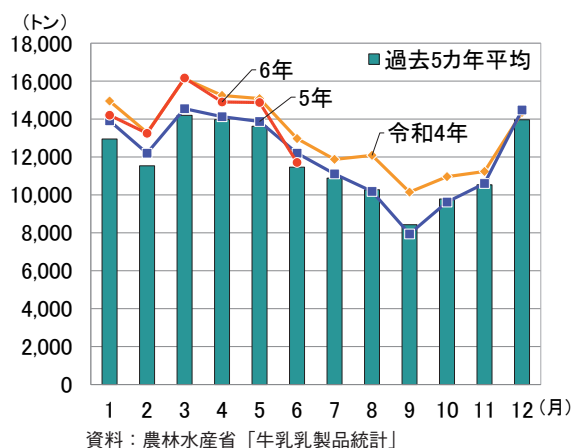


図3 バターの在庫量の推移

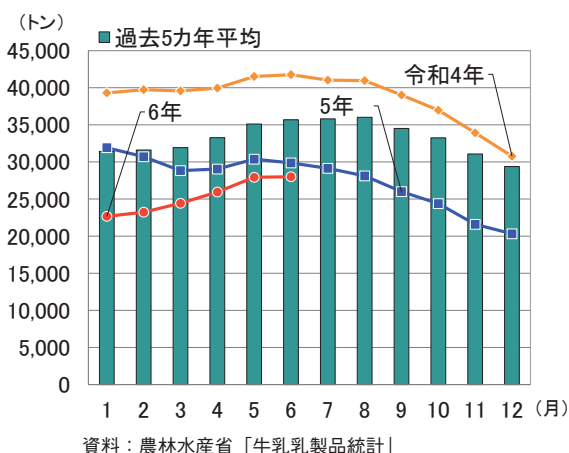
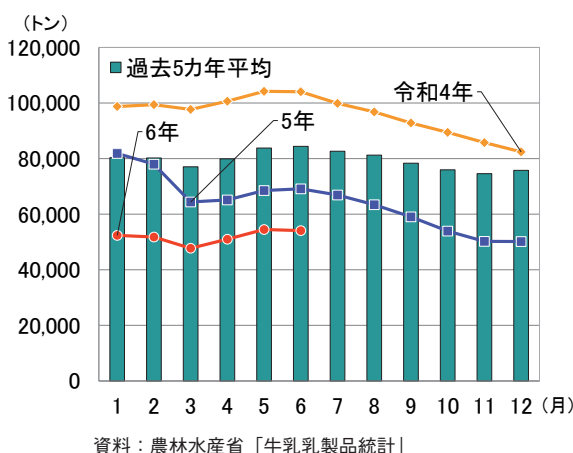


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



## 6月の脱脂粉乳生産量、前年同月を7カ月ぶりに下回る

6月の脱脂粉乳の生産量は、1万1712トン（前年同月比4.0%減）と前年同月を7カ月ぶりに下回った（図4）。出回り量は1万2223トン（同3.8%増）と前年同月をやや上回った（農畜産業振興機構調べ）。6月末の在庫量は、5万4078トン（同21.8%減）と前年同月を大幅に下回った（図5）。

## 令和6年度の生乳生産量、前年度比0.9%増の見込み

一般社団法人Jミルク（以下「Jミルク」という）は令和6年7月30日、「2024年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」を公表した（表）。これによると、6年度の生乳生産量は前回5月31日の公表値741万3000トンから下方修正され、738万6000トン（前年度比0.9%増）となった。地域別に見ると、北海道では前回公表値427万9000トンから下方修正され、424万1000トン（同1.6%増）となった一方で、都府県では前回公表値313万4000トンから

上方修正され、314万5000トン(同0.1%減)となった。

Jミルクは、5月の見通しにおいては、今年度の気温について「猛暑」と設定していたが、今回の見通しでは「観測史上最高レベルの猛暑」となった昨年度と同程度の暑さでの

試算に変更した。また、昨年夏と同水準の暑熱に見舞われたとしても暑熱ダメージを最小限に抑え生産基盤の毀損を防ぐため、現場での適切な暑熱対策の重要性を継続的に呼びかけ、対応の徹底を図る必要があるなどとしている。

表 生乳生産量の見通し

(単位：千トン、%)

	全国		北海道		都府県	
	生産量	前年度比(増減率)	生産量	前年度比(増減率)	生産量	前年度比(増減率)
令和3年度	7,647	2.9	4,311	3.7	3,335	1.8
4年度	7,533	▲1.5	4,254	▲1.3	3,279	▲1.7
5年度	7,324	▲2.8	4,175	▲1.9	3,149	▲4.0
6年度(見通し)	7,386	0.9	4,241	1.6	3,145	▲0.1

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」(令和3～5年度)、一般社団法人Jミルク「2024年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」(7月30日公表)(令和6年度)

注：令和3～5年度は実績値、6年度は見通しである。

(酪農乳業部 山下 侑真)

## 鶏卵

### 6年7月の鶏卵卸売価格、前年同月比37.5%安

#### 卸売価格

令和6年7月の鶏卵卸売価格(東京、M玉基準値)は、1キログラム当たり200円(前年同月差120円安、前年同月比37.5%安)と、高値で推移した前年同月を大幅に下回った(図)。同価格は、月初から末日まで変動がなく推移した。

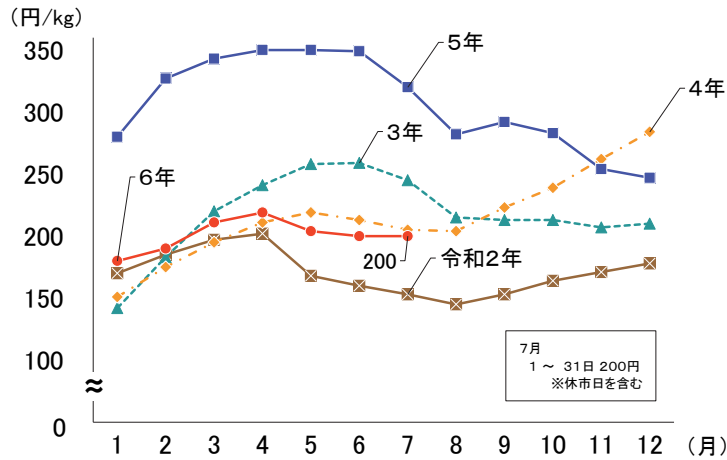
また、過去5力年の7月の平均卸売価格との比較では、7.0%安とかなりの程度下回る結果となった。

供給面を見ると、6月24日に事業対象

期間が終了した成鶏更新・空舎延長事業<sup>(注)</sup>の影響により生産羽数が減少する中、気温の上昇による産卵率および個卵重の低下がみられている。一方、需要面を見ると、量販向けは、気温の上昇による消費減退などから低迷し、加工・業務向けも、需要の回復の遅れが継続している状況にある。

(注) 鶏卵生産者経営安定対策事業の一つであり、一般社団法人日本養鶏協会が実施する事業。同事業は、鶏卵の標準取引価格(日ごと)が安定基準価格を下回った日の30日(10万羽未満の生産者は40日)前から標準取引価格(日ごと)が安定基準価格を上回る日の前日までに、更新のために成鶏を出荷し、その後60日以上空舎期間を設けた生産者に対して奨励金を交付するものである。

図 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」  
注：消費税を含まない。

## 家計消費量

6月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）は、906グラム（前年同月比10.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の6月の平均消費量との比較でも、2.6%増とわずかに上回る結果となった。

（畜産振興部 大西 未来）

# 令和6年「畜産統計」について

農林水産省が令和6年7月9日に公表した「畜産統計（令和6年2月1日現在）」について、肉用牛、乳用牛、豚、ブロイラーおよび採卵鶏の概要を以下の通り報告する。

## 【肉用牛】飼養戸数、飼養頭数ともに前年比減

飼養頭数、肉用種は前年比0.8%増、乳用種は同3.7%減

肉用牛の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和6年は3万6500戸（前年比5.4%減）と前年からやや減少した（表1）。飼養頭数は、近年、増加傾向にあったものの、267万2000頭（同0.6%

減）と前年からわずかに減少した（図1）。この結果、肉用牛の1戸当たり飼養頭数は、前年から3.6頭増加し、73.2頭となった。

肉用牛は、肉用種および乳用種<sup>（注1）</sup>に大別され、飼養頭数のうち約7割を占める肉用種は189万7000頭（同0.8%増）と前年からわずかに増加した一方、約3割を占める乳用種は77万4900頭（同3.7%減）と前年からやや減少した（図2）。

肉用種の内訳を見ると、子取り用めす牛は前年比0.7%減の64万400頭（肉用牛全体に占める割合は24%）と前年からわずかに減少した一方、肥育用牛は同1.3%増の84万1600頭（同31%）、育成牛は同2.2%増の

表1 肉用牛の飼養戸数・頭数および1戸当たり飼養頭数の推移

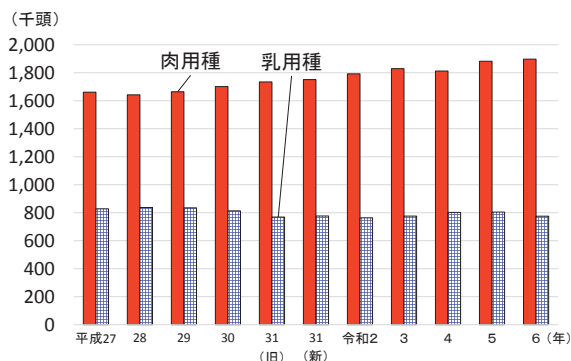
	全国飼養戸数		全国飼養頭数											1戸当たり飼養頭数		
			合計		肉用種				乳用種							
	(戸)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)	うち子取り用めす牛		交雑種		ホルスタイン種ほか			(頭)	前年差(頭)			
					(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)			前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)
令和2年	43,900	▲3.7%	2,555.0	1.1%	1,792.0	2.3%	622.0	2.8%	763.4	▲1.7%	495.4	▲0.7%	267.9	▲3.6%	58.2	2.8
3年	42,100	▲4.1%	2,605.0	2.0%	1,829.0	2.1%	632.8	1.7%	775.8	1.6%	525.7	6.1%	250.0	▲6.7%	61.9	3.7
4年	40,400	▲4.0%	2,614.0	0.3%	1,812.0	▲0.9%	636.8	0.6%	802.2	3.4%	555.3	5.6%	246.9	▲1.2%	64.7	2.8
5年	38,600	▲4.5%	2,687.0	2.8%	1,882.0	3.9%	645.2	1.3%	804.4	0.3%	569.6	2.6%	234.8	▲4.9%	69.6	4.9
6年	36,500	▲5.4%	2,672.0	▲0.6%	1,897.0	0.8%	640.4	▲0.7%	774.9	▲3.7%	567.2	▲0.4%	207.7	▲11.5%	73.2	3.6

資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：数値は四捨五入の関係で内訳とは必ずしも一致しない。

図1 肉用牛飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：平成31年(旧)までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年(新)および令和2年以降は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。

41万5300頭(同16%)と、ともに前年からわずかに増加した。

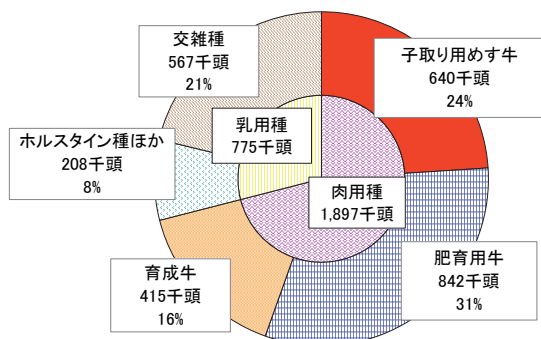
乳用種の内訳を見ると、交雑種は同0.4%減の56万7200頭(同21%)とわずかに、ホルスタイン種ほかは同11.5%減の20万7700頭(同8%)とかなり大きく、いずれも前年から減少した。

(注1)「畜産統計」では、乳用種の肉用牛とは、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種の牛のうち、肉用を目的に飼養している牛で、乳用種と肉用種の交雑種を含むと定義されている。

### 下位6階層および「500頭以上」で飼養戸数、飼養頭数ともに前年比減

肉用牛の総飼養頭数規模別の飼養戸数については、100～499頭までの2階層は前年を上回ったものの、1～99頭までの下位6階層および最上位の500頭以上の階層はいずれも前年を下回った(図3)。同飼養戸数は、1～4頭の階層が最も多く、全体の21%を占める7710戸(前年比9.1%減)、次いで10～19頭の階層が6640戸(同5.7%減)、5～9頭の階層が6610戸(同6.8%減)となっており、いずれも同18%を占めた。これら下位3階層の同割合は、前年から1ポイント低下の57%となった。また、同2%を

図2 令和6年肉用牛飼養頭数の内訳



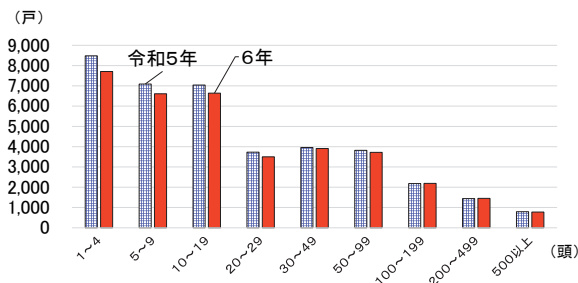
資料：農林水産省「畜産統計」

注：数値は2月1日現在。

占める500頭以上の階層は775戸（同2.1%減）、同4%を占める200～499頭の階層は1450戸（同0.7%増）となり、これら上位2階層の同割合は前年と同じ6%となった。

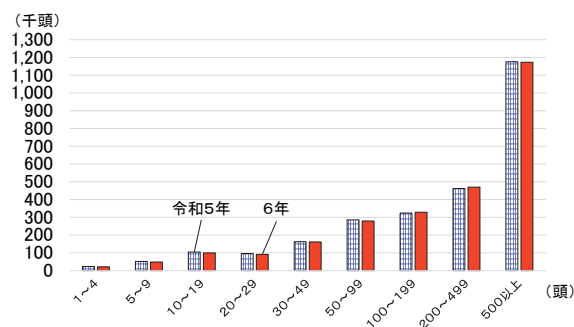
肉用牛の総飼養頭数規模別の飼養頭数については、飼養戸数と同様の傾向が見られ、100～499頭までの2階層は前年を上回ったものの、1～99頭までの下位6階層および最上位の500頭以上の階層はいずれも前年を下回った（図4）。同飼養頭数は、500頭以上の階層が最も多く、全体の44%を占める117万3000頭（同0.3%減）、次いで200～499頭の階層が同18%を占める47万頭（同1.7%増）となった。これら上位2階層の同割合は前年と同じ61%となった。

図3 肉用牛総飼養頭数規模別飼養戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
注：数値は各年2月1日現在。

図4 肉用牛総飼養頭数規模別飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
注：数値は各年2月1日現在。

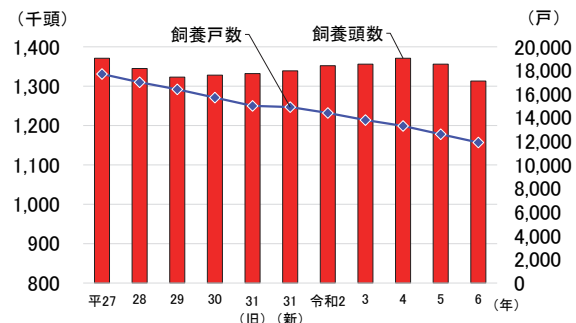
(畜産振興部 大西 未来)

## 【乳用牛】全国の飼養戸数、飼養頭数ともに前年比減

### 全国の飼養頭数、2年連続で減少

乳用牛の飼養戸数は減少して推移しており、令和6年2月1日現在の飼養戸数は、1万1900戸（前年比5.6%減）と前年からやや減少した（図5）。地域別に見ると、北海道では5170戸（同3.9%減）と前年からやや減少し、都府県では6730戸（同7.0%減）とかなりの程度の減少となった（表2）。また、乳用牛飼養頭数は、131万3000頭（同3.2%減）となり、平成29年以降増加していた飼養頭数は令和5年から2年連続での減少となった。地域別に見ると、北海道が82万1500頭（同2.5%減）、都府県では49万1200頭（同4.2%減）と、いずれも前年を下回った。一方、1戸当たりの飼養頭数は、110.3頭（同2.5%増）と前年からわずかに増加した。地域別に見ると、北海道が158.9頭（同1.5%増）、都府県が73.0頭（同3.0%増）といずれも増加している。

図5 乳用牛飼養頭数・飼養戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年以降は牛個体識別全国データベース等の行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。

表2 令和6年 乳用牛の全国農業地域別飼養動向

	令和6年					
	飼養戸数 (戸)		飼養頭数 (頭)		1戸当たり飼養頭数 (頭)	
		前年比 (増減率)		前年比 (増減率)		前年比 (増減率)
北海道	5,170	▲ 3.9%	821,500	▲ 2.5%	158.9	1.5%
都府県	6,730	▲ 7.0%	491,200	▲ 4.2%	73.0	3.0%
東北	1,650	▲ 7.3%	89,300	▲ 6.8%	54.1	0.6%
北陸	218	▲ 8.0%	11,100	▲ 5.9%	50.9	2.2%
関東・東山	2,070	▲ 8.4%	161,500	▲ 3.9%	78.0	5.0%
東海	462	▲ 7.8%	43,400	▲ 4.2%	93.9	3.9%
近畿	337	▲ 5.6%	22,800	▲ 2.1%	67.7	3.7%
中国	508	▲ 7.1%	45,700	▲ 2.1%	90.0	5.4%
四国	242	▲ 7.3%	15,900	▲ 1.2%	65.7	6.5%
九州	1,180	▲ 4.1%	97,800	▲ 4.2%	82.9	▲ 0.1%
沖縄	65	1.6	3,680	▲ 6.4%	56.6	▲ 7.8%
全国	11,900	▲ 5.6%	1,313,000	▲ 3.2%	110.3	2.5%

資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：数値は四捨五入の関係で内訳とは必ずしも一致しない。

### 「100頭以上」の階層、飼養頭数の全体の半数を占める

乳用牛飼養戸数を成畜（満2歳以上の牛または2歳未満の経産牛。以下同じ。）の飼養

頭数規模別に見ると、「100頭以上」の階層が2152戸（前年比2.2%増）と前年からわずかに増加し、全体の18.1%を占めた（表3）。このうち「200頭以上」の階層は、692戸（同2.5%増）と前年からわずかに

表3 乳用牛の飼養頭数規模別飼養戸数・飼養頭数の推移

		令和2年	3年	4年	5年	6年	前年比 (増減率)	飼養戸数/頭数別階層比
全国飼養戸数 (戸)		14,400	13,800	13,300	12,600	11,900	▲ 5.6%	100.0%
乳用牛成畜飼養頭数規模別飼養戸数 (戸)	1～19頭	2,890	2,710	2,510	2,460	2,260	▲ 8.1%	19.0%
	20～29頭	1,880	1,740	1,590	1,420	1,280	▲ 9.9%	10.8%
	30～49頭	3,500	3,280	3,120	2,860	2,650	▲ 7.3%	22.3%
	50～79頭	2,870	2,820	2,750	2,600	2,460	▲ 5.4%	20.7%
	80～99頭	952	946	917	871	859	▲ 1.4%	7.2%
	100頭以上	1,961	2,030	2,119	2,105	2,152	2.2%	18.1%
	うち200頭以上	561	610	669	675	692	2.5%	5.8%
全国飼養頭数 (千頭)		1,352	1,356	1,371	1,356	1,313	▲ 3.2%	100.0%
乳用牛成畜飼養頭数規模別飼養頭数 (千頭)	1～19頭	63	59	59	62	50	▲ 19.1%	3.8%
	20～29頭	70	63	62	54	53	▲ 3.0%	4.0%
	30～49頭	206	191	175	167	148	▲ 11.3%	11.3%
	50～79頭	270	264	257	247	229	▲ 7.3%	17.4%
	80～99頭	129	128	121	118	112	▲ 5.1%	8.5%
	100頭以上	601	634	680	689	708	2.7%	53.9%
	うち200頭以上	322	354	392	403	413	2.4%	31.4%

資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

注2：全国飼養戸数及び全国飼養頭数は子畜を含む。

注3：数値は四捨五入の関係で内訳とは必ずしも一致しない。

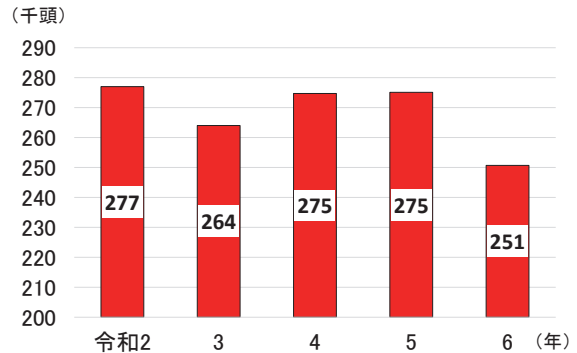
増加した。100頭未満の階層はいずれも減少した。

また、乳用牛飼養頭数を成畜の飼養頭数規模別に見ると、「100頭以上」の階層が70万7600頭（同2.7%増）と前年からわずかに増加し、全体の53.9%を占めた。このうち「200頭以上」の階層は、41万2900頭（同2.4%増）とわずかに増加し、全体の31.4%を占めた。一方で、100頭未満の階層については、すべての階層で減少した。飼養戸数は前年から5.6%減少しているが、「100頭以上」の階層では飼養戸数および頭数ともに増加しており、経営の大規模化の進展が見受けられる。

#### 乳用種めす出生頭数、3年ぶりに減少

直近1年間（令和5年2月～令和6年1月）の乳用種めす出生頭数は、25万700頭（前年同期比8.9%減）となり、3年ぶりの減少となった（図6）。

図6 乳用牛出生頭数（乳用種めす）の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
注1：数値は各年2月1日現在。  
注2：出生頭数は前年2月から本年1月までの1年間。

（酪農乳業部 山下 侑真）

### 【豚】飼養戸数、飼養頭数ともに前年比減

飼養頭数、肥育豚は前年比2.0%減、子取り用めす豚は同4.2%減

豚の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和6年は3130戸（前年比7.1%減）と前年からかなりの程度減少した（表4）。飼養頭数は、879万8000頭（同1.8%減）と前年からわずかに減少した

表4 豚の飼養戸数・頭数および1戸当たり飼養頭数の推移

	全国飼養戸数		全国飼養頭数									1戸当たり飼養頭数		
	(戸)	前年比(増減率)	合計		子取り用めす豚		種おす豚		肥育豚		その他		(頭)	前年差(頭)
			(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)	(千頭)	前年比(増減率)		
令和2年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3年	3,850	▲10.9%	9,290.0	1.5%	823.2	▲3.5%	32.0	▲11.8%	7,676.0	1.1%	758.8	12.7%	2,413.0	293.6
4年	3,590	▲6.8%	8,949.0	▲3.7%	789.1	▲4.1%	30.0	▲6.3%	7,515.0	▲2.1%	615.4	▲18.9%	2,492.8	79.8
5年	3,370	▲6.1%	8,956.0	0.1%	791.8	0.3%	26.8	▲10.7%	7,512.0	▲0.0%	625.4	1.6%	2,657.6	164.8
6年	3,130	▲7.1%	8,798.0	▲1.8%	758.3	▲4.2%	24.8	▲7.5%	7,362.0	▲2.0%	653.1	4.4%	2,810.9	153.3

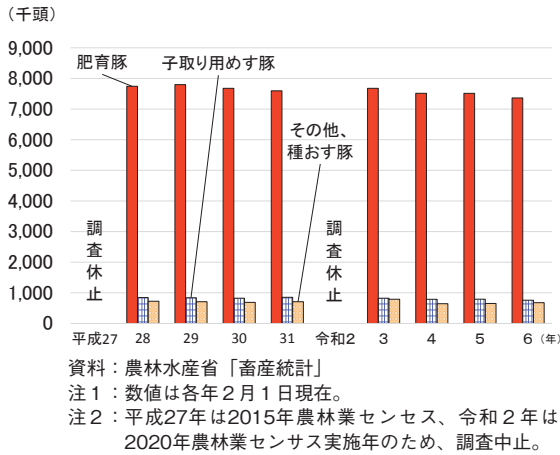
資料：農林水産省「畜産統計」  
注1：数値は各年2月1日現在。  
注2：数値は四捨五入の関係で内訳とは必ずしも一致しない。  
注3：その他とは、肥育豚、子取り用めす豚および種おす豚以外の豚。また、肥育用のもと豚として販売する場合も含む。  
注4：令和2年は2020年農林業センサス実施年のため、調査休止。  
注5：令和3年は、平成31年と比較した増減率。



(図7)。この結果、豚の1戸当たり飼養頭数は、前年から153.3頭増加し、2810.9頭となった。

内訳を見ると、子取り用めす豚は前年比4.2%減の75万8300頭とやや、肥育豚は同2.0%減の736万2000頭とわずかに、種おす豚は同7.5%減の2万4800頭とかなりの程度、いずれも前年から減少した一方、その他(販売される肥育用のもと豚を含む)は同4.4%増の65万3100頭と前年からやや増加した。

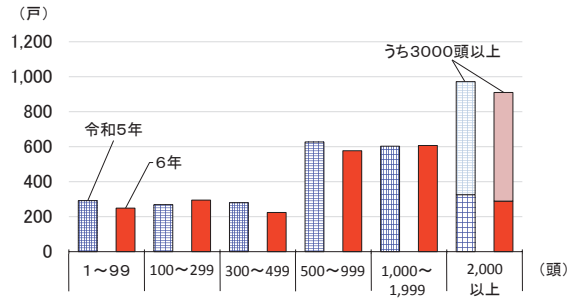
図7 豚飼養頭数の推移



### 「3000頭以上」の階層、飼養頭数の全体の約7割を占める

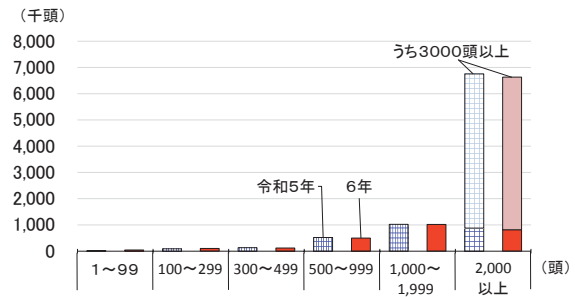
肥育豚の飼養頭数規模別の飼養戸数については、100～299頭および1000～1999頭の2階層を除くすべての階層で前年を下回った(図8)。同飼養戸数は、2000頭以上の階層が最も多く、全体の32%を占める910戸(前年比6.4%減)、次いで1000～1999頭の階層が同21%を占める607戸(同0.7%増)、500～999頭の階層が同20%を占める577戸(同8.0%減)となった。これら上位3階層の同割合は前年と同じ73%となった。このうち3000頭以上の階層は、同22%を占める621戸となった。

図8 肥育豚の飼養頭数規模別飼養戸数の推移



肥育豚の飼養頭数規模別の飼養頭数については、1～299頭までの下位2階層はいずれも前年を上回った一方、300頭以上の上位4階層はいずれも前年を下回った(図9)。同飼養頭数は、2000頭以上の階層が最も多く、全体の79%を占める663万4000頭(同1.8%減)となった。このうち3000頭以上の階層は、同69%を占める581万7000頭(同1.0%減)となった。

図9 肥育豚の飼養頭数規模別飼養頭数の推移



## 【ブロイラー】飼養羽数、出荷羽数ともに前年比増

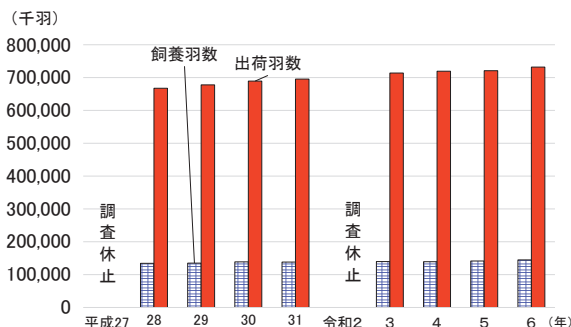
飼養羽数は前年比2.4%増、出荷羽数は同1.5%増

ブロイラーの飼養戸数は、中規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和6年は2050戸（前年比2.4%減）、出荷戸数は2100戸（同0.9%減）と、ともに前年からわずかに減少した（表5）。また、飼養羽数<sup>（注2）</sup>は1億4485万9000羽（同2.4%増）、出荷羽数<sup>（注3）</sup>は7億3192万9000羽（同1.5%増）と、ともに前年からわずかに増加した（図10）。この結果、ブロイラーの1戸当たり飼養羽数は、前年から3300羽増加し7万700羽、1戸当たりの出荷羽数は、同8500羽増加し34万8500羽となった。

（注2）2月1日現在で飼養している鶏のうち、ふ化後3カ月未満で出荷予定の鶏の飼養羽数。

（注3）前年の2月2日～本年の2月1日の1年間に出荷した羽数。2月1日現在で飼養を休止し、または中止している場合でも、年間3000羽以上の出荷があれば、羽数が計上されている。

図10 ブロイラー飼養羽数および出荷羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。ただし、出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。

注2：飼養羽数、出荷羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。

注3：飼養羽数とは、2月1日現在で飼養している鶏のうち、ふ化後3カ月未満で出荷予定の鶏の飼養羽数をいう。

注4：平成27年は2015年農林業センサス、令和2年は2020年農林業センサス実施年のため、調査休止。

表5 ブロイラーの飼養戸数・羽数、出荷戸数・羽数、1戸当たり出荷羽数の推移

	全国飼養戸数		全国飼養羽数		1戸当たり飼養羽数		全国出荷戸数		全国出荷羽数		1戸当たり出荷羽数	
	(戸)	前年比 (増減率)	(千羽)	前年比 (増減率)	(千羽)	前年差 (千羽)	(戸)	前年比 (増減率)	(千羽)	前年比 (増減率)	(千羽)	前年差 (千羽)
令和2年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3年	2,160	▲4.0%	139,658	1.0%	64.7	3.3	2,190	▲3.1%	713,834	2.7%	326.0	18.3
4年	2,100	▲2.8%	139,230	▲0.3%	66.3	1.6	2,150	▲1.8%	719,259	0.8%	334.5	8.5
5年	2,100	0.0%	141,463	1.6%	67.4	1.1	2,120	▲1.4%	720,878	0.2%	340.0	5.5
6年	2,050	▲2.4%	144,859	2.4%	70.7	3.3	2,100	▲0.9%	731,929	1.5%	348.5	8.5

資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。ただし、出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。

注2：飼養戸数・羽数、出荷戸数・羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。

注3：飼養羽数とは、2月1日現在で飼養している鶏のうち、ふ化後3カ月未満で出荷予定の鶏の飼養羽数をいう。

注4：各年2月1日現在で飼養のない場合でも、過去1年間に3000羽以上の出荷があれば出荷戸数に含める。

注5：令和2年は2020年農林業センサス実施年のため、調査休止。

注6：令和3年は、平成31年と比較した増減率。

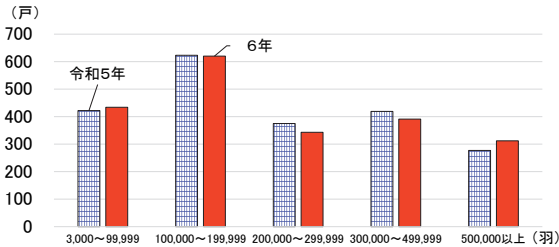
### 「50万羽以上」の階層、出荷羽数の全体の半数を占める

ブロイラーの出荷羽数規模別の出荷戸数については、3000～9万9999羽および50万羽以上の最下位と最上位の2階層はいずれ

も前年を上回った一方、それ以外の3階層はいずれも前年を下回った（図11）。同出荷戸数は、10万～19万9999羽の階層が最も多く、全体の30%を占める620戸（前年比0.5%減）、次いで3000～9万9999羽の

階層は同21%を占める434戸（同2.8%増）、30万～49万9999羽の階層は同19%を占める391戸（同6.7%減）となった。

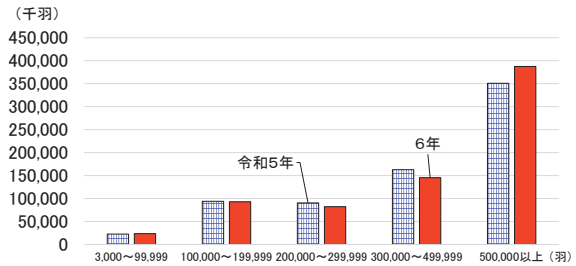
図11 ブロイラー出荷羽数規模別出荷戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。  
 注2：飼養羽数、出荷羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。  
 注3：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

ブロイラーの出荷羽数規模別の出荷羽数については、出荷戸数と同様の傾向が見られ、3000～9万9999羽および50万羽以上の最下位と最上位の2階層はいずれも前年を上回った一方、それ以外の3階層はいずれも前年を下回った（図12）。同出荷羽数は、50万羽以上の階層が最も多く、全体の53%を占める3億8755万9000羽（同10.5%増）、次いで30万～49万9999羽の階層は同20%を占める1億4542万5000羽（同10.7%減）となった。

図12 ブロイラー出荷羽数規模別出荷羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：出荷羽数は前年2月2日～本年2月1日の1年間。  
 注2：飼養羽数、出荷羽数には、年間出荷羽数3000羽未満の飼養者を含まない。  
 注3：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

## 【採卵鶏】飼養戸数、飼養羽数ともに前年比減

飼養羽数、ひなは前年比5.7%減、成鶏めすは同0.9%増

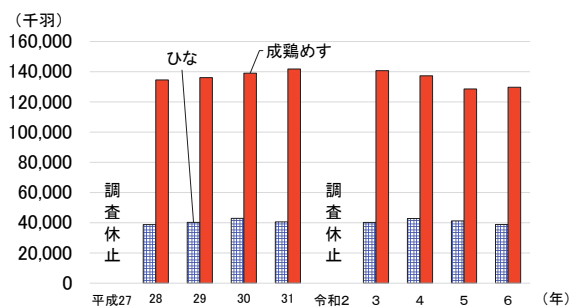
採卵鶏の飼養戸数は、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、令和6年は1640戸（前年比3.0%減）と、前年からやや減少した（表6）。また、飼養羽数は、ひなは3887万羽（同5.7%減）と前年からやや減少した一方、成鶏めすは1億2972万9000羽（同0.9%増）と前年からわずかに増加した（図13）。この結果、成鶏めすの1戸当たり飼養羽数は、前年から3000羽増加し、7万9100羽となった。

表6 採卵鶏飼養戸数・飼養羽数の推移

	全国飼養戸数		全国飼養羽数						1戸当たり成鶏めす飼養羽数	
	(戸)	前年比(増減率)	合計		ひな(6カ月齢未満)		成鶏めす(6カ月齢以上)		(千羽)	前年差(千羽)
			(千羽)	前年比(増減率)	(千羽)	前年比(増減率)	(千羽)	前年比(増減率)		
令和2年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3年	1,880	▲11.3%	180,918	▲0.8%	40,221	▲0.9%	140,697	▲0.8%	74.8	7.9
4年	1,810	▲3.7%	180,096	▲0.5%	42,805	6.4%	137,291	▲2.4%	75.9	1.1
5年	1,690	▲6.6%	169,810	▲5.7%	41,231	▲3.7%	128,579	▲6.3%	76.1	0.2
6年	1,640	▲3.0%	168,599	▲0.7%	38,870	▲5.7%	129,729	0.9%	79.1	3.0

資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：種鶏のみの飼養者を除く。  
 注3：種鶏を除く。  
 注4：令和2年は2020年農林業センサス実施年のため、調査休止。  
 注5：令和3年は、平成31年と比較した増減率。

図13 採卵鶏のひなおよび成鶏めす飼養羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：種鶏のみの飼養者を除く。  
 注3：種鶏を除く。  
 注4：平成27年は2015年農林業センサス、令和2年は2020年農林業センサス実施年のため、調査休止。

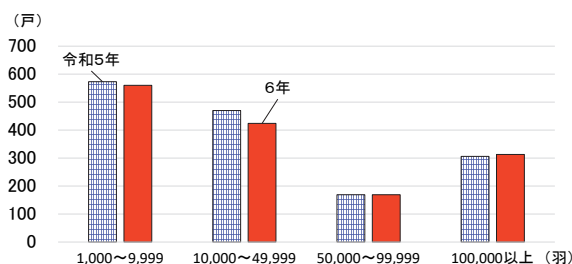
「10万羽以上」の階層、成鶏めす飼養羽数の全体の約8割を占める

成鶏めすの飼養羽数規模別の飼養戸数については、1000～4万9999羽までの下位2階層はいずれも前年を下回った一方、10万羽以上の最上位の階層は前年を上回った(図14)。なお、5万～9万9999羽の階層は前年並みとなった。同飼養戸数は、1000～9999羽の階層が最も多く、全体の38%を占める560戸(前年比2.3%減)、次いで1万～4万9999羽の階層は同29%を占める424戸(同9.8%減)、10万羽以上の階層は同21%を占める313戸(同2.3%増)、5万～9万9999羽の階層は同12%を占める169戸(前年同)となった。

成鶏めすの飼養羽数規模別の飼養羽数については、1000～4万9999羽までの下位

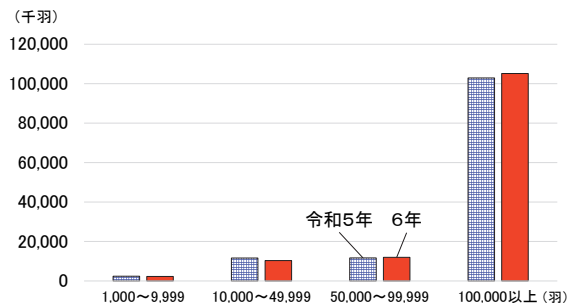
2階層はいずれも前年を下回った一方、5万羽以上の上位2階層はいずれも前年を上回った(図15)。同飼養羽数は、10万羽以上の階層が最も多く、全体の81%を占める1億516万2000羽(同2.2%増)、次いで5万～9万9999羽の階層は同9%を占める1196万羽(同2.5%増)となった。

図14 成鶏めす飼養羽数規模別飼養戸数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

図15 成鶏めす飼養羽数規模別飼養羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：学校、試験場などの非営利的な飼養者は含まない。

(畜産振興部 大西 未来)